

不安喚起がバウム描画に与える影響

渡邊 千鶴

(宮城学院女子大学人文科学研究科)

【目的】

本研究ではバウムテストにおける再検査法を実施し、検査間に不安喚起操作を与えることでバウム描画への影響の有無を検討する。

また、変化がみられる場合、変化の場所、またその要因について、バウム描画および気分尺度から比較検討し、その結果から総合的に信頼性の程度を観察する。

【方法】

被験者：宮城学院女子大学大学生（2,3年）33名

用具：4Bの鉛筆・消しゴム・A4の画用紙

質問紙：不安を喚起するための質問紙

有害群(実験群)

携帯電話の電磁波が人体に与える悪影響を強調した情報を含む。

無害群(統制群)

携帯電話の電磁波が人体にほとんど影響しないことを強調した情報を含む。

いずれの群も情報提供後に携帯電話に対する意識調査項目を含む。

気分を測定するための質問紙(POMS)

POMS(Profile of Mood States)から、T-A(緊張-不安) A-H(怒り-敵意)の気分尺度21項目を引用

心理検査：バウムテスト(再検査法)

指示は「実のなる木を1本描いてください」

手続き：被験者33名を2群に分け(実験群16名、統制群17名)それぞれ別室で計2回の検査を行い、テスト間に質問紙による不安喚起操作を行う。

なお、集団で実施したため他者が見えないよう配慮し、分析においては、分析者のバイアスを防ぐためにブラインド分析を用いた。

【結果】

不安喚起操作後、携帯電話に関する7つの質問項目でt検定を行った結果((2)影響関心(3)影響不安)について1%水準で有意な差がみられた。

また、不安喚起操作直後における気分尺度21項目(POMS)についてt検定を行った結果、A-H(怒り-敵意)のみ5%水準で有意であった。

さらに不安喚起前後のバウム描画から、不安傾向の出やすいとされる8つの項目(1位置上下2位置左右、

3サイズ・4筆圧・5傾斜・6基部右ふくらみ・7影・8用紙)について検定を行った結果、

操作前→すべての項目で両群に有意差はなし

操作後→「バウム基部右ふくらみ」項目にのみ有意差あり

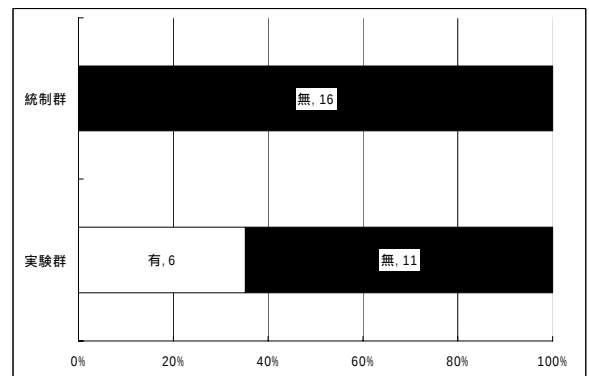


図1：不安喚起後バウム基部右ふくらみ

【考察】

不安喚起操作後、携帯電話電磁波に関する質問紙で、(2)影響不安 (3)影響関心の2項目に有意差があることから、電磁波が人体に悪影響を及ぼすことを強調した情報を与えられた方(実験群)が、電磁波に対する意識が高まったといえる。

また、POMSによる気分評価の結果、A-H(怒り-敵意)において実験群と統制群に有意な差があったため、不安喚起操作により、実験群が電磁波に対してより強い反応を示し、不快な気分に変化したと予測される。

さらに、描画に関する8つの項目については、不安喚起操作後の実験群に、基部の右がふくらむという変化がみられ、不安を喚起されることによって携帯電話電磁波が人体へ悪影響を及ぼすことへの恐怖感が高まるとともに、拒否の反応が示されたと考えられる。それが不安喚起操作後のバウム描画に投影されたのであろう。

【結論】

感情が、ダイレクトに描画に投影されるという、バウムテスト特有の即効性と投影力の高さが証明された。

しかしこの変化は、実験者が意図的に作り上げた感情の操作であるため、極めて一時的なものである。よって全体的印象に変化は無く、本質的なパーソナリティは保持している。つまり情緒操作による人格としての変転は皆無に等しく、信頼性は非常に高く、それと同時に即応的な投影力も兼ね備えていると考えられる。